
大日本帝国VS先進国達～マジでありえねえよ、この戦い!～

りす君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大日本帝国VS先進国達くマジでありえねえよ、この戦い！く

【Nコード】

N3272B

【作者名】

りす君

【あらすじ】

百年後の日本。老人は法によりいなくなり、幼児が増えるばかり。問題発生！若者がいねえ！そんな中、先進国から謎の物体で襲われた日本。どうなる、我が国！？そんな我が国の存亡を賭けた戦いが今、始まる。

p r o l o g u e :: アメリカンボルシチ襲来! (前書き)

コメディ系のSFです。マジでありますから。

prologue…アメリカンボルシチ襲来!

2107年、大日本帝国。

俺は、渡部^{わたべ} 慎一^{しんいち} 41才。職業は一応官僚である。政府の一員であり、また家庭では妻を持ち、2児の父親である。

数年前、大日本帝国は高齢化社会を終わらせるため、周りから反対された“老人殺戮法^{ろうじんさつりくほう}”をやむなく採択した。これに基づき、今は65才以上の老人はこの国には存在しない。この法律により、長く続いた高齢化問題は終止符を打たれた。

少子化問題もアジアの一夫多妻制を見習い、我が国でも数十年前に導入した。そして、子供の数もここ数年の間にぐんと増え続けている。

これで、問題は解決…とはいかなかった。まだ我が国の問題は沢山ある。一つ例を挙げれば、赤ん坊と老人の間の人間が極端に少ない事だ。それが今、我が国で一番キツイ点であり、まだまだ赤字からは脱け出せない原因の一つである。

貧しい我が国を必死で支える我ら社会人としては、もう限界だった。この国は潰れると近々崩壊すると俺すらも思っていたその矢先の出来事だった。先進国の奴らにいきなり襲撃されたのは…。

ある日の朝、俺はテレビを観ながら朝食を取っていた。ぼんやりと観ていたテレビの画面が急に変わってしまったので俺は何だろうと思ひ、アナウンサーが言っている言葉に耳を澄ませた。

「ええ、緊急ニュースです。アメリカの方向から、巨大な物体が我

が国に近付いて来ます！あつ、ロシアの方向からも！」

俺は、疑問に思った。多分、これには誰しも疑問に思うだろう。

「巨大な物体？それに何故、日本へ来る？」

物体をよく見ると、ロボットのような恰好をしていた。しかも、ミサイルみたいな物も積んでいるようにも見えたのだ。

俺は急いで、友人である政府直属の記者、青木 あおき 健太 けんた に電話を掛けた…。

b a t t l e 1 .. 前途多難な日本側（前書き）

ロボットSF…名前はカッコイイけど、ありきたりだなあ。

battle1..前途多難な日本側

数秒で青木に電話が繋がった。

「もしもし、青木か？ テレビ見たか？」

青木は呑気に、

「ああ、見たよ。アメリカやロシアの方から謎の物体が飛んできてるんだろ？ どうせ、日本は終りさ。」

と、言った。

「で、政府の反応は？」

と俺が言うと、青木は真面目な口調に変わり、

「総理や、トップ集団が朝一で集まって、会議してやがる。多分、アレを出すかどうかだろうけど。」

と、言った。俺は質問した。

「アレとはあのアレか？」

すると、青木は笑いながら、

「まさか。アレ出したら、日本は降伏宣言を出したと同じ扱いされちまうから無いと思う。んじゃ、後でな。」

こう言って、青木は一方的に電話を切った。俺は、青木の言葉を信じた。信じたかった。しかし、数十秒後にその言葉は崩れた。

テレビに目を戻すと、日本の現内閣総理大臣、坂山さかやま 太智たちが報道陣の前に現れた。坂山総理は、こう言い放った。

「日本が、他国の軍勢に襲われる事は予測していた。そこで我が国が極秘で開発したロボ、“神風”を発進させ謎の物体を撃退しようと思う。」

俺はその発言に啞然とした。この瞬間、日本が完全に負けたと感じた。

日本国民が、そのロボの名前を嫌っていた。そして、アレ扱いにしたロボ、“神風”。

兵器としては、弱すぎて使い物にならない程。なのに政府は、借金までしてそのロボを造り上げてしまった。

装備は至ってシンプル。バルカン砲と小さなミサイルのみ。これじゃあ勝てない。

肉弾戦に持ち込もうとすると、機体はパンチ、キック共に結構強いが、機体自体脆いので長く戦えない。本当に先制攻撃用なのだ。ああ、どうしたら良いんだ?!

テレビでは、神風の発進前の映像を映し出された。

(日本某所)

「神風発進5秒前! 5、4、3、2、1、ファイヤー!!!!」

(ズゴゴゴゴゴ!!!!!! :プスン。)

ヒューン…

「機能停止、機能停止!」

「神風、いまだ発進できず!」

battle2::三国混乱?! (前書き)

ホント、SFかコメディーか解らなくなってきました…。では、どうぞ。

battle2::三国混乱?!

神風は、未だに発進出来ずにいた。その時の相手の様子は？という
と…

「うん？イエローモンキー共、何故戦闘機を発進させない？」

アメリカ側の総司令官が言う。ああ…言い忘れていましたけど、これから話される英語とロシア語は全て日本語に訳されますのでご安心を。（ホントは英語もロシア語もチンパンカンパンで、打てないから。）

「我が国が、世界で一番国土を広く持つ理由は、単に軍事力が強いから。あんな星達に私らの未来の国土を渡してたまるかっ！星共に一発ずつ、威嚇砲を放て！！」

と、言ってロシアの総司令官は全戦闘機に命令した。

「何い？↑（石原裕○郎さんをモノマネしてる芸人風）ロシア軍が我等の戦闘機に威嚇射撃だどっ！山さんっ！↑（これも、裕○郎さん出演の某ドラマのセリフ。もちろん、アメリカ軍に山さんという人はいない。）こちらも、ロシア軍に威嚇射撃ヨーイっ！」
こうして、アメリカ軍もロシア軍に対して威嚇射撃を行なった。

その頃、日本側は？というと…

「総理、アメリカ軍とロシア軍が何故か互いに攻撃しあっていますっ！！」

「何い？」

「もういいよっ！」

金杉かなすぎ官房大臣が何故か総理にツツコミを入れた。

「うわぁん！金杉が苛めるう！」

総理、泣く。周りの側近や大臣などが一瞬でヒいた。

「と、とにかく…今、我が国は大変な事態に陥っていますので何とかしてでも守りきらなければっ！」

と、白鷺しらぎ外交大臣が言う、周りもその言葉に頷き、拍手した。

「で…どうするのだ、白鷺外交大臣。」

と、金杉が言う、と総理が口を挟んだ。

「やっぱあ、神風っしょ、案外っしょ。我が国が借金を増やしてまで造り上げたヘーキなんだからさ！」

総理の言葉に、黙り込む面々。総理は博学なのだが、実に性格が幼稚っぽいので困り果てていたのだ。

「で…総理。その…神風には一体、誰が操縦するのですか？ちなみに、私は嫌です。」

と、金杉が言う、と総理が手を上げる。

「じゃあ、私が。」

総理などに操縦鑑を任せるなど言語同断。次々に、

「じゃあ、私が。」

の声、周りの面々から聞こえてきた。最後に取り残された金杉が手を上げた。

「しょうかないですね、私が…」

と、言った瞬間に…皆様は解りましたよね…

「どうぞ、どうぞ、どうぞ。」

と、金杉以外の周りの面々は彼に譲った。

「なっ?! やめてくださいっ! じゃあ…、こうしましょう。」

金杉は、総理に耳打ちした。総理は、頷いてニヤリとした。

「なるほど…、よしあの方に神風の操縦を託そう。」

総理は、側近に直ぐ様手紙を書かせた。

それから3日後の渡部家：

「渡部さん、郵便でえす。」

（朝っぱらからうるせえなあ。）

と、思いながら慎一は郵便を貰った。中を開くと：

「うわっ、※赤紙かよ！古っ！」

（※赤紙：日本が戦時中、兵を集めるため一般人に兵役の義務を受けさせようと送った赤い手紙の事。）

「しかも：総理から。ギャル文字ばっか：うん？」

慎一は、ある文面を発見し、青ざめた。

「うっ、ウツソォー！ー！ー！ー！」

渡部家全体に響き渡る、情けない声。

そこには間違いなく、

「渡部慎一、神風の操縦を命ずる。」
と、記しるされていたのだった…。

b a t t l e 3 .. 神風、やっと発進!! (前書き)

今回は真面目…かな (?)

あ、多分ですけど…次の話で完結です。

battle3..神風、やっど発進!!

俺は、急いで車を調達して総理官邸へ足を運んだ。

(ピンポン、ピンポン、ピンポン!!)

「はいはい、誰かね…こんな朝早くに来るのは…。」

(ガチャ)

「っ!!」

この時の俺の凄すぎる形相を見たら、総理だって驚くだろう。

「チミいゝ、何しとるのかね？私を誰だと思ってる？総理だぞ、総理。日本のトップはこの私…」

「総理っ！御願います。」

俺は、あんなのに乗りたくないのだ。そこまでして日本を守りたくない。だから…

「フン、土下座しても無駄だもんね。もう、私から軍に頼んどいた

から：グッドラック！！」
(ボタンっ)

：こん時の俺は、初めて総理に殺意を感じていた。無情にも程がある！

俺だって、家族がいる。両親はとくに亡くなっているけれど、愛する妻と我が子がいるのだ。

しかし、今は一刻を争う緊急事態なのだ。誰かがやらないと、この国は：

俺は急いで車に戻り、運転手にこう伝えた。

「調布飛行場^{ちようふ}に行ってくれ！」

「待っていましたよ、渡部さん。さあ、時間がありません。早く搭乗して下さいっ！」

俺が調布飛行場に到着し、軍の最高部に会い、彼から言われた言葉がこれだった。完璧に人任せじゃねえか！

「“神風”の操縦法は解りますよね？設計者はあなた自身ですから。さっ、テイクオフしましょう！！頑張ってくださいねえ」

確かに俺は設計者だが…ってか、軍の最高司令官さん…ノリノリじゃん！！

俺はブツブツ文句を言ったが、それが俺の最期の言葉になるとは…今は知るよしも無かった。

「神風…発射まで5…4…3…2…1…0！！！」

（神様…カミさんと我が子達…そして全日本国民を連合軍から守って下さい。）

そう祈りを捧げると俺は操縦桿そうじゅうかんを握り締めた…。

b a t t l e — e n d & a m p . j u s t — a — l i t t l e — e p i l o g

最後は…渡部の雄志が描かれていると思います…ではどうぞ。

調布飛行場を飛び立って約1時間。敵の艦隊は未だに見えて来ない。俺は、ホバリングしながら待ち続けていた。いわゆる“待ち伏せ作戦”だ。

最初は、特攻で行こうかなと思ったが、待っても中々敵が出てこないの待ち伏せに変更したのだ。

それから数時間経った時、前方からいきなりアメリカの艦隊が数体、一直線にやってきた。俺はバルカン砲を数百発乱射した。

(ダダダダダ…)

(チュドッ!! チュドッ!! チュドッ!!…)

百発百中…までとはいかないが、かなりの数の相手の艦隊を撃破した。

続いてロシア軍もやって来た。それらもバルカン砲でかなりの数を返り射ちにしてやった。

(これは…勝機があるかもしれない。)

俺がそう思ったその時…

(グウオウオウオウオ…)

と、けたたましい爆音と共に、とてつもなくデかい米露タッグ艦隊が目の前に現れた。デかい艦隊はいきなり俺を攻撃してきた。

(バババババババ…)

ガトリング（連射銃）だった。バルカン砲より、遥かにレベルが高いガトリング。神風の機体は言うまでもなくダメージを受けた。

（くっ！…こりゃ、相手にならん！どうすれば…うんっ?!）

俺が苦し紛れに見たオペレートシステムの中に、見慣れないボタンがあった。それは…

“自爆ボタン”

と、書かれてあった。多分、これは“これ以上、何も出来なくなったらこれで自滅しろ”という暗示だろう。

（これ以上、コイツと戦っても勝てない。なら、この艦隊と一緒に…）

俺は、決心してそのボタンに指を近付ける。

（ゴメンな…もう二度と帰ってこれないや…さよなら、元気だな。）

妻と息子に届かない気持ちを胸に抱きつつ、俺は目を閉じてボタンをゆっきりと押した…

(チュドーーーーー！！！)

(渡部の墓の前に総理と渡部の妻が拝んでいる)

「渡部君…よくやったよ…」

「あなた…命がけで日本を守り抜いてくれて…本当にありがとう…」

(渡部の墓石に切り刻まれた文字)

“ 神風が運んでくれた大日本帝国の救世主 ”

(おわり)

b a t t l e — e n d & a m p ; j u s t — a — l i t t l e — e p i l o g u e

最後は何となく微妙な終わり方だったと思います。

でも、こういう風な終わり方がこの小説が唯一のSF系と言えたのかもしれないですね。

最後まで読んで頂き、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3272b/>

大日本帝国VS先進国達～マジでありえねえよ、この戦い!～

2010年10月10日22時33分発行